

豊田市民芸祭

「とよた連句まつり」2017作品集

平成二十九(2017)年十一月十二日

於 豊田市福祉センター46会議室

主催 ころも連句会

公益財団法人豊田市文化振興財団

(葵) 真つ青な空! 豊田恒例の連句まつりは愉快な伝統文学。ジンズにスニーカーのような、若々しい遊びの楽しさも満載です。老若各座の賑いに、連句の神様もきつと笑って下さったことでしょう。

(芙美) 当日実作作品をお届けします。お好きな形式の座に自由に飛び入りして頭をしぼる付け句は、楽しい相談もする共同制作。いかがでしたか。かくて歌仙を含む長短多様な形式の九巻が三十人余の個性豊かに巻き上がりました。お客様は豊田市はもちろん、名古屋・日進・多治見・春日井、稲沢、etc.etc. 愛知県連句協会もでき県内の連句仲間も充実。岐阜からも参加、ありがとうございます。(藍) 1994年に豊田市が「とよた連句恋々まつり」大会を初興行したとき、新聞TVの見出しは「連句いまよみがえる」でした。今は歌仙もメディアに載り連句会も全国で増加中です。この日もインターネット連句KUSARI(ここ十八年かけて十三万句続いている連句です)からいらした方数人が記念撮影。虚の空間と実の空間の仲間の出会いです。新聞投稿を通じてのお仲間も。毎年ご常連も十年ぶりも。知る人知らぬ人、句を付けて出会う人生のなつかしさ。—またお会いしましょうね。

\*\*\*\*\*作品\*\*\*\*\*

一 連句ROCK ①

「柿実る」の巻

捌 板倉合

柿実る連句祭りの逢瀬かな

板倉 合 秋

皺の数だけ爽やかな笑み

K子 秋

組み紐の時を忘れる縁の端

イズズ 秋

月光集め卓の石露

ロッシー 春

行く春の平和三色一盃口

宮川尚子 春

離江下れば頬白の鳴く

武藤美恵子 春

平成二十九年十一月十二日 首尾 於豊田市福祉センター

\*「平和三色一盃口」は麻雀の役。中国語で読んでください。

捌(合)「連句ROCK」は授業実践向けに作られた

短い形式です。ウォーミングアップにもってこい。二

季で月の座か花の座を入れて(両方入れてもいい)恋

もぜひ入れてという形式です。ここでも自由に、発句

から恋。麻雀の役を中国語で句にし、挙句は桂林の山

水画のような風景で、美しい巻になりました。

二 連句ROCK ②

「ポケットの夢」の巻

捌 板倉合

ポケットの夢をとりだす秋日和

板倉 合 秋

甘柿ひとつ少年の食む

ひわ 秋

葛城の古墳の主の眠る丘

合 春

頭上かすめて蜂のハミング

森田美耶子 春

花万朶むしろ広げる野菜売

ひわ 春

団扇を作る白壁の家

執筆 春

平成二十九年十一月十二日 首尾 於豊田市福祉センター

捌き(合)より終了まじかの短時間での「連句ROCK」。

ポケットの夢が広がりそうな楽しい巻になりました

した。ありがとうございました。



三 連句14 ①妖怪尽くし

「九尾の狐」の巻

捌 矢崎藍

碧天や九尾の狐と旅に出む

藍 冬

連れを誘ふ雪姫の声

草笛奏 冬

塗り壁はボードゲームに興じて

宮川尚子 冬

一反木綿とぐる巻いてる

ひわ 冬

ゴルゴンの庭埋め尽くす石の薔薇

奏 夏

悪夢ゆつくり咀嚼する猿

コロシ 夏

大入道心療内科受診して

尚子 夏

ポルターガイスト連呼する母

石川桃李 夏

月の下座敷童子のありどころ

坪井まち子 秋

曼珠沙華にも宿る生き霊

ひわ 秋

御息所<sup>みきよところ</sup>のせて牛車の傾いて

藍 秋

天邪鬼めが遠せんぼする

コロシ 秋

フルートのトリルにダンス花の精

未那 春

目々連が探してる春

尚子 春

平成二十九年十一月十二日首尾 於豊田市福祉センター

捌(藍)連句14も授業用。学生が盛んに遊んだ初心者用です。付けと転じを確保。構成は表裏なし(二面)。

四季をいれ。月の座、花の座各二です。きょうはちょうどOGの若手さんたちも混じり、古今東西の妖怪

たちを現代にひきすりこんで、遊べ遊べ。よく笑いましたねえ。奏さん妖怪資料提供感謝です。

㊦ 連句14 ②猫尽くし

「にゃんだらりん」の巻 捌 矢崎藍  
猫百態にゃんだらりんや山眠る 藍 冬

熱爛舐めた三毛の親分 深津明子 冬

吾輩に変な名前を付けおつて 宮川尚子

背中踏み踏みマッサージ中 明子

悪いけどパソコンキーの上で寐る 桃里

懐石缶は一個千円 未那

夕空ににやにや笑い残る月 草笛奏 秋

またたびの枝手折りお土産 明子

肉球は純粹ピンクのご令嬢 尚子

やさぐれているドラの求愛 々

蛇なんぞ高速パンチでやつつけて とみ子 夏

黒い毛並は天鵝絨の艶 奏

花吹雪乳粥はこぶ清涼殿 明子 春

忍びこんでた涅槃図の隅 未那 春

平成二十九年十一月十二日首尾 於豊田市福祉センター

捌(藍)臨時追加の猫連句です。でもルールは「猫」を使うのは発句だけ。あとの句は「猫」の字禁止ですよー。そう、猫と言わずに句意で猫を詠む。これぞ連句。こりや厳しいといいつつ、ハハ吾輩なんてあの猫ですよ、いまだきパソコン猫風景も納得。えっ、餌は懐石缶とはまあ贅沢な世。やがてチェシヤ猫に、猫パンチも出て、清涼殿の句は宇多天皇が手づから飼って有名な黒い仔猫ですね。特急捌きでどたばたでしたが、可愛い14匹ありがとうござ

ございました。にゃん。

\*\*\*\*\*  
獅子香冠

「初時雨」の巻 捌 稲垣渥子

初時雨猿も小養をほしげなり 芭蕉

半纏まとうあつたかさうな みの虫アツパ 冬

つっぱりも嫁をめとつてから静か 赤鈴 冬

目立ち始めた長男の髭 宮川尚子

真鍮の時計が刻む春の波 田中イスズ 春

光を浴びて花艶を増し 中西静子 花

ぐるりんと水温む里一周す 近藤とみ子 春

大飛球追い走って好捕 アツパ

連戦の疲れビールでかつとばす 赤鈴 夏

浴衣に映える下駄の赤い緒 静子 夏

さらさらと小川大河に届く頃 間瀬英美

田んぼ広々昔は荒れ野 とみ子

留守勝ちの母のフアッション秋めいて 渥子 秋

ほろ酔い機嫌居待ち<sup>おろが</sup>拌み 赤鈴 月

問答は無用螞蟻鎌を振り 尚子 秋

実験室で眠るフラスコ 々

平成二十九年十一月十二日 首尾 於豊田市福祉センター

捌(渥子)「獅子香冠」は故窪田薫氏考案の形式。獅子(四句四連)十六句です。発句を分解して、長句の冠と短句の杵に文字を配置。一連一季、四季順行、月一花一、細かい規則でも、お好みの方があり、連句

まつりで「獅子香冠」を取り上げるようになり、5回目です。短句の最後の文字が決まっています。合わせて句を考える所が難しく、でもその工夫を連衆で頭をひねるところが面白いのだと思います。今年は今全く初めての方も多かったのですが、縛りの中で生まれる言葉の面白さ、意外性を楽しんでいただけかなと思っています。ありがとうございました。

\*\*\*\*\*  
半歌仙①

「冬に入る」の巻 捌 板倉合

きしみたる雨戸繰る朝冬に入る 宇井 希 冬

ちらほら見える庭の山茶花 渡辺洋子 冬

テープルの並ぶプリンに手が伸びて 恒川暁子

九人兄弟次男ちゃっかり 板倉 合

満月をかすめ旅客機何処へか 武藤美恵子 秋

芸術祭の審査頼まれ 洋

ウ黒猫のタンゴ歌えば秋茜 ロッシー 秋

気まぐれだから好きよカルメン ひわ

裏付けのない恋ばかり重ねつつ みの虫アツパ

インターネットの電源はオフ 暁

くたびれた文庫本手にバス停へ 奏

矢車菊の青なつかしく コロン 夏

月涼し良縁願う母の墓 近藤とみ子 夏

ランタン飛ばす台湾の空 森田美耶子

大将の羽つき餃子丸く焼き 洋

純米酒呑むうらかな午後 合 春

無住寺の花の階世を隔つ 暁 春

初虹の立つ遠き山の端 洋 春

平成二十九年十一月十二日 首尾 於豊田市福祉センター

捌(合)連句の冒頭は当季当座。ここ数日冬になったことを実感の発句にちらほら咲いた山茶花の脇で始まりました。でも、きょうはいつもと違い、三々五々と出入りの激しい座です。皆さんは、次々に句を下さる。その句に捌きが注文を付ける。そうすると、その場に居合わせた人が一言二言――、助け船もある。話しているうちに、ピタツとはまる言葉がでてきて、句を出して下さった方も、捌きも納得。そして、次へと。楽しい座でした。

連句ってみんなで作る文芸なんだと改めて実感した巻でした。ありがとうございました。

三 半歌仙② 尻取り

「生姜湯や」の巻 捌 伊藤良重

生姜湯や古墳巡りの独り旅 板倉 合

田人の見ゆる小春日の窓 富田八穂 冬

どつしりと腰据え置いた富士の山 ロッシー

まとめた髪ゆらゆらと揺れ 暁

零点に作り笑いの丸い月 洋子 秋

さちさちが出る庭の片端 間瀬芙美 秋

ウ榎の実をつまみたる疎開の地 由川慶子 秋

命懸けなる餅拾い衆 ロッシー

移りゆく季節を感じ歩き出す 原田

酸っぱい思いぬぐえないまま みの虫アツパ

松林等伯の筆空を切り 森田美耶子

きりきりしやんと月に夏帯 宇井 希 夏

おびき出す闇のサイトの深い淵 富田八穂

小さなパン屋香るパン種 長坂節子

ねんねんよねんねんしなよと子守唄 宇井 希  
 耕す後に鳥が続いて コロン 春

停留所バスを待つ間に花見酒 ひわ 春  
 研究日誌綴る春昼 宮川尚子 春

平成二十九年十一月十二日 首尾 於豊田市福祉センター  
 捌(良重) 伝統半歌仙でもこちらは「KUSARI」

でおなじみの「尻取り」遊びです。ルールは、前句の最後から1〜3文字をもらって置くこと。7「そかい

のち」からは「いのち」をもらっています。「連句はしたことがない」というお客様もいらつしやって、そ

のほかのルールは月・花以外はあまりこだわらませんでした。皆さん、「連句というだけで頭を使うのに、その上尻取り？」などとおしゃべりしながら付けて

くださいました。それでもご自分の一句ができるのと、とても満足されていたので、楽しんでいただけただけです。ありがとうございました。



二十韻

「連句まつり」の巻 捌 間瀬芙美

賑やかに連句まつりや冬日和 間瀬芙美 冬

卓に置かるる石路の花 由川慶子 冬

ウスポーツ紙孫の活躍切り抜きて 稲垣渥子

スタミナ食の試食あれこれ 倉知武好

ウかがや飛ぶ誰が住まふか月の裏 みの虫アツパ

おんぶバッタの潜む庭先 武藤美恵子 秋

刈田道バツいち娘の帰り来る 慶 秋

母系社会の辿る行く末 渥 秋

モーニング次はランチの日課表 武

特急電車の通過する町 芙

ナオ風鈴がびたりと止みし旅の宿 渡辺洋子 夏

滝の音する庚申の夜 ア 夏

君となら恋の奴隷に甘んじて 恒川暁子

削除したのにまだ鳴る電話 武

クルーズ船バハマ諸島へ税避難 暁

快気祝いは何にしやうか 慶

ナウ神棚に折鶴九百九十九 々

白酒に酔ふ姉と妹 渥 春

真も偽も花は語らず咲くがまま 草笛奏 春

フルート奏で風はうららか 執筆 春

平成二十九年十一月十二日 首尾 於豊田市福祉センター  
 捌(芙美) 会場に各座がたけなわのころ二十韻も始まりです。二十韻は二十句。一花、二月。東明雅先生考案ですが、最近では現代連句として最も普及し、国民文化祭の募吟形式にもしばしばなっています。一巻の序破急や式目はすべて歌仙準用です。

さて、わが座は女性群にまじり、遠来の男性たちも並んでいます。え、風鈴がびたりと止まったら何かありそう。「ないんですよ。庚申の夜だから恋は御法度」と意味深なオトナの話がはじまって。故事来歴をアツパ学者のお話に耳を傾けることができるのも連句の座です、しかしそれにも負けずに、捌きのもとには「恋の奴隷」などと記した短冊がまいこんで。ついに

その句関連の、「二十三夜愛しぬいて」という歌をひそやかなアルトでかかせていただいたのでした。やはり恋は大事ですね。皆さんの生き生きとした楽しい句で、笑いのほじける座を、ありがとうございますとごましました。

\*\*\*\*\*

### Ⅱ 歌仙 笠着

#### 脇起「いらご崎」の巻

捌 長坂節子 石川 葵

いらご崎似るものもなし鷹の声

芭蕉 冬

海黙らせて木枯のゆく

宮川尚子 冬

スマートフォン操作どうやら慣れてきて長坂節子

足取り軽く登る階段 みの虫アツパ

ミステリー月を待つ間に読み終わり

洋子 秋

風船葛触れもせず揺れ

暁 秋

ウ 寄り添えば思いがけず穴まどい

ひわ 秋

静寂破れて本音ぼろぼろ

ロッシー

濡れ事を身につまされる名女形

田中イスズ

こども三人枕並べて

宇井 希

各国の首脳表面にこやかに

コロソ

冷酒に映す月と仲間と

あかすず 夏

四十雀どこがちがうか五十雀

K子 夏

刻を知らせる村の梵鐘

間瀬芙美

未来では空飛ぶ車聖火点け

坪井まち子

つかみきれない夢を夢みる

洋 春

しゃちほこの背にのり遊ぶ花の雲

暁 春

旅の一茶の草鞋のどらか

石川 葵

ナオ 磯開き岩場は波に洗われて

深津明子 春

なつかしの歌うたうのは誰

草笛 奏

旧租界路面電車の影長く

近藤とみ子

引き返せない初恋の道

尚

ひとり寝の夜の深さに疼く胸

希

残っているのまだ借金が

石川桃里

里神楽篝火に浮く母の顔

ま 冬

古い日記を飽かず眺めて

出原樹音 冬

引き出しの奥に転がる謎の鍵

稲垣渥子

ドラエモンから学ぶあれこれ

武藤美恵子

渡来せし陶工の墓照らす月

森田美耶子 秋

はてなの茶碗猫またぐ秋

ドリー 秋

ナウ新米の香りも喰うて握り飯

板倉 合 秋

髪はおさげにわたし末っ子

節

エナメル製のセーブ気分の赤い靴

耶

卒業証書くるり丸める

音 春

言霊ときょうもたわぶれ花ゆらら

矢崎 藍 春

からくり人形描く初虹

葵 春

平成二十九年十一月十二日 首尾 於豊田市福祉センター

捌(節子)とよた連句まつり恒例の笠着歌仙です。

ご出席の皆さんに「忘れずに寄って一句付けてください」とお願いしました。笠着とは中世に寺社の

法楽連歌で貴人も笠を着けたまま(身分をかくして)

庶民とともに句を付けたことをいいます。

今日は三十人ほどの方がこのコーナーにいらして

歓談、付け句。いろいろな世代の句が揃いました。き

らりとした若い句、落ち着いた年長者の句、仕事で多

忙な方の句、それぞれの個性の集まった一巻になり

ました。

連衆の皆様と、この現代の暮らしのひとこま、自然

をいとおしみながら、共に生きていることを確認し

あえましたことうれしく、心からお礼申し上げます。

